

D.M. 2016年卒 地域マネジメントコース

## こんな学生時代を過ごしました

**自身の殻を破らないと、自分がどう生きたいかは見えてこない。**

そのことを身をもって学んだ学生生活でした。「気ままに生きる」をモットーに、興味を持った活動にはとにかく飛び込んでみる、そんな姿勢で学内外の様々な取り組みに参加した4年間。

中でも最も力を注いだのが猪倉農業関連PJです。実習先を巡るバスハイクで現地を訪れ、「ここにしよう」と期待が確信に変わりました。何をしたいか明確ではなくても、猪倉には挑戦し成長できる環境があると直感したのです。毎週末の畑作業や地域活動への参加を通して、世代を超えた交流の中で、自分の振る舞いが常に問い直される3年間でした。周囲の意見を聞きながら方針を決める役割も担い、「他の人がやらないなら自分がやろう」と誰よりも実習に顔を出していました。

経験を積み重ねていく内に、できることが少しずつ増え、「何でもできそう」根拠のない自信を持って迎えた就活。しかし、十数社に応募した結果は、不選考の連続でした。思いがけない現実に焦りながらも、向き合うのが怖くて目を逸らし、いつの間にか就活よりも学外の活動に逃げる自分がいました。

そんな時期に没頭したのが、高校生と大学生の対話を授業で届ける「カタリバ」です。自分の考えや想いを言語化する機会が多く、将来に不安を抱えつつも続けられた理由は、そこに「自分も問われる場」があったからだと思えます。

転機は、マイプロジェクト合宿。高校生が自ら考えたアクションをキラキラした目で発表する姿を見て、胸に湧いたのは感動より悔しさでした。高校生に「何がしたい？」と問いながら、自分自身は本当に目指したい姿を見ていなかったのだと、ボロボロと涙がこぼれていました。自分がなりたい姿に真正面から向き合えないといけない、殻が破れた瞬間でした。誰かの小さな挑戦に寄り添い、背中を押せる存在でありたい。その思いに気づき、教育の現場に進む決意を固めました。

「社会の中で自分はどうありたいのか」この問いに気づいた学生生活。その解は、自分の殻を破ることでしか見えてこない、今なお、自分の人生を生きる指針となっています。

## 卒業後こんなキャリアを歩んでいます

主に卒業してからの9年間は、教育・人材育成を軸にキャリアを積んできました。最初に勤めたのは沖縄県の離島・久米島町での町営塾講師。地域おこし協力隊として、3年間、島に一つしかない高校の生徒を対象に探究学習や推薦入試指導に従事。同時に、島の地域活動にも数多く参加させていただき、充実した3年間を過ごしました。

その後3年間の任期を終え、プログラミング講師へと転職します。1年半勤めたのちに、ひよんなことから、フリーランスへと転身。ご縁をいただいて、全国の町営塾講師の採用や研修に携わったり、行政職員向けのDX人材育成研修の企画・運用、高校生向けの探究学習プログラムの作成やサポートと、幅広く関わらせていただきました。

3年間、フリーランスとして働いた後、自分の興味が移ろいつつあると感じ、仕事を手放して放浪。1ヶ月間、1人で海外に行ってみたり、NPOの活動にボランティアにて従事。

改めて、九州に住みたいという想いから、福岡へと戻ってきて、今は放浪期間中に興味を持ち始めたヴィンテージ家具屋に勤めています。

大事にしてきたのは、「自分はどんな人でありたいのか」その一点です。

今は「人と人としての自然な関係性を作りたい」と考えて、「場づくり」に焦点をあてて新しい道を歩き始めました。

## 現役生へのメッセージ

やりたいことがない、将来がわからない、という人は、まずは自分の知らない世界に飛び込んでみて。怖いと思うかもしれないけど、それは知らないだけだから。自分自身も社会のことも。動いてみることで気づく自分の想いがきっとあるはず。そして、自分に問いを投げてください「自分はどんな人でありたいんだろう？」と。過去も未来も形作るの、今の自分です。



猪倉実習の農業アドバイザー 疋田さんと作物計画について話す様子。自分自身の生き方は自分で決めるを近くで見せてくれた存在。社会人になってからも叱咤激励をいただきました。



仕事以外にもNPOや地域活動に参加。総計3000人を超える市民ミュージカルの誘導統括をした後の一枚(左から2番目)